

## ギールケ文庫の購入事情・補遺

山田欣吾

先頃、フライブルク大学の法史学教授カール・クレシェルが来日したとき、一橋大学へギールケ文庫を見に来ませんかと誘ったところ、予想通りの積極的な関心ぶり、たてこんだスケジュールの中から時間をやりくりして国立まで出向いて来ることになった。予想通りと言ったのは、クレシェルが最近ドイツで、ギールケ最晩年の大著『ドイツ私法論』の最終巻となるはずだった『家族法』の遺稿を発見し、その刊行に従事していることを聞いていたからである。

そうなると誘った方としては、ギールケ文庫なるものとその入手事情について一応の説明を用意しないわけにはいかず、にわか勉強を強いられる羽目にたち至った。調べにかかってみて、この著名な文庫の購入事情が肝心なところで分らないのには少なからず驚いたが、幸い図書館の方々の協力により、若干の新しい事実が明らかになったので、孫田秀春教授の「ギールケ文庫入手のいきさつ」、岩田新教授の「Gierke 目録について」（いずれも『一橋大学附属図書館史』所収）などによってこれまで知られていた事実を補う意味で、簡単に記しておくことにしよう。

ドイツにおけるゲルマン法学派を代表する最後の巨峰オットー・フォン・ギールケ(1841—1921)の蔵書約1万冊を一橋が手に入れたのは1921(大正10)年の冬、東京高商から商科大学への念願の昇格が成った翌年のことであった。そして、すぐそれに続いて翌1922年夏、大学はまた、経済学におけるオーストリア学派の総帥カール・メンガー(1840—1921)の大蔵書1万8千余冊をも獲得する。これは新生商大の意欲をいかに示す出来事であったが、この「快挙」が可能となる背景には、現地で入手交渉に当たった先生方の努力もさることながら、資金調達の上でも並々ならぬ苦労があったものと想像される。

実は、メンガー文庫については、『附属図書館史』に、現地で入手交渉に当たった「留学生」から学長に宛てた報告書簡3通が収録されていて、その時の取引や送金の実務を生々しく伝えているのだが、ギールケ文庫についてはこれまでこの種の事柄が全く分らなかった。メンガーは一切の業者の仲介を排して、1922年、3万ドルで購入されたことがはっきりしているのに対し、ギールケの場合には購入価格すら知られていなかった。それだけに、今回、この空白部分を埋める貴重な資料が図書館の佐々木さんによって未整理の事務書類の中から発掘されたことは全く喜ばしい幸運というほかない。

その資料というのは黒表紙の小型会計帳簿。中には二種類のことが書かれていて、その一つはギールケ、メンガーその他いくつかのまとまった書籍を購入するための資金ぐりと支出金額とを事後的に整理した記事、もう一つは書籍購入のための寄附金10口に関する個々の運用記録である。几帳面に整った筆蹟からして、明らかに当時の図書館書記鈴木善吉氏(在職1905—1943年)の手になるもので、恐らくは、寄附金の運用に関する責任を図書館が負っていたところから、この種の記帳が必要になったものと思われる。

それはともかく、帳簿の冒頭「Gierke文庫1件」という見出しの2頁は、つぎのように書かれている。

「大正十一年四月中、先ニ在外留学生ノ手ヲ経テ買入レタル故ギルケ教授ノ蔵書到着シ、全年七月中三菱商事會社へ代金、運賃、諸掛り其他一切合計 22,486.87 ヲ支拂フ為次ノ諸口ヨリ資金ヲ引出ス。

1. 大学経常費ヨリ 7,000.00

2. 八十島資金ヨリ	¥ 11,045.85
3. 堀越資金ヨリ	4,438.03
4. 正田資金ヨリ	2.99
計	<u>22,486.87</u>

つづいて、大正十二年四月、「正田資金ヨリ小額ヲ支出シ置ク事ハ不便ニ付、之ヲ堀越資金ニ振替へ」たことが記される。そして、大正十二年四月以降文庫の製本がはじまり、同年十一月までに¥1,462.88を「青木資金」から一時立替えて支払ったこと、また翌大正十三年七月決算のとき、この分も「堀越資金」と振替えて整理したことが述べられ、最後に

其結果 Gierke 文庫ノ資金勘定ハ

1. 大学経常費ヨリ	7,000.00
2. 八十島資金ヨリ	11,045.85
3. 堀越資金ヨリ	5,903.90
計	<u>23,949.75 トナル</u>

と結ばれる。

ここからまず分るのは、この時の文庫購入という商取引の形であって、孫田教授が記しているように、ギールケ家側はライプツィヒのフォック書店に売却を委託していたのだが、買い手の一橋側は三菱商事が買入業務を代行したわけである。1921年の恐らく暮と思われる時期に両者の間で合意された取引価格や支払条件は分らない。だが翌22年7月、大学が三菱商事に支払った22,486円87銭をギールケ文庫の価格とみることには何の問題もないだろう。事のついでに記しておけば、この22年7月にはメンガー文庫の購入代金(総額71,391円58銭)の支出も重なっており、このとき、大学は両文庫のために9万4千円の大金を一気に用立てなければならなかったわけである。大塚金之助教授も書いているように(「カール・メンガー文庫の思い出」)、図書館長——当時は幹事とよばれた——三浦新七「先生をはじめ、学校当局者は、資金堅めのために、非常な苦心をなすった」に違いない。

ところで、ギールケ文庫の購入資金であるが、校費の7千円は明らかだとして、「八十島資金」についても幸いこの時の「寄附書」の写しが残されている。それによると、代價金壹萬九百六拾参円八拾七銭は、「故八十島親徳記念ノ為メ八十島文庫トシテ寄附候也 大正十一年 月 日」とあり、寄附者は芝区白金台町の士族八十島誠之氏、そしてその氏名の後ろには、「代 太田為三郎」と当時の図書館幹事代理の名が添えられている。これは大正九年に死去した親徳氏の嫡子誠之氏が、まだ東京商大の学生だったことによるものだろう。

『人事興信録』によれば、八十島親徳という人は宇和島から上京して東京高商に学んだ後、直ちに渋沢男爵家の秘書となり、終生同家内外の経営をきりまわした人物である。『大正人物辞典』は同氏について、実業家としての地位や活動を伝えるほか、「東京高等商業学校同窓会の幹事を勤め声望を一身に蒐む、往年(四十二年)高商生徒間に紛擾を生じ総退学事件と為るや〔申西事件のこと＝注〕、君は同窓会代表者の一員として日夜東奔西走終日盡力時に暁に及び、遂に全部の復校を見るに至りし事、今尚人の耳目に新たなる所なり」、というエピソードを特に記している。

この八十島親徳氏の弟に、やはり東京高商に学んだ樹次郎氏があり、この人を通じて上の帳簿に出てくるもう一人の人物堀越善重郎氏へと線が通ずる。すなわち、堀越氏は東京高商を卒業して貿易業界に入るが、後に自ら堀越商会を興して絹織物の輸出業を手広く営んだ実業家であり、八十島樹次郎氏は同商会で支配人の地位にあった人物である。堀越氏は恐らく大正十年か十一年、母校に図書購入費として1万円を寄附しているが、そのうち5千9百余円がギールケ文庫関係の支

出にあてられたわけである。今日、われわれ利用者が文庫の書物を手にするとき「堀越善重郎ヨリ寄贈」の朱印を目にするのがそれにほかならない。なお、ギールケ文庫と関連して帳簿に名が出る「正田資金」というのは、大正十一年「令息故明一郎君追福記念のため」日清製粉の正田貞一郎氏が寄附した図書購入資金5千円のことであり、また「青木資金」というのは、大正九年、東京の呉服太物商和泉屋の青木五兵衛氏（明治23年卒）によって寄附された同じく5千円のことである。

許された紙数もつきたので、最後に、ギールケ文庫の価格22,486円87銭は今日のいくらに当るか、という点にふれてこの報告を終えることにしよう。研究所の先生方に計算して頂いたところ、1921年（大正10年）の消費者物価を1とすると、1980年のそれは840になるとのこと。これに基づいて計算すると、当時大学が支払った金額は今日の18,888,970円に相当する、ということになる。2千万足らずの週刊朝日のユニークな連載『値段の風俗史』によると、ほぼ同一の期間に総合雑誌が817倍、公務員の初任給が1,355倍、そして銀座の地価は22,000倍になっているという。こうした数字の意味の読み方を私は知らないが、上のような計算結果をクレシエルにそのまま伝えたとき、彼の話がすぐ第一次大戦後ドイツの経済苦境のことに移ったことの意味は痛いように分り、変なうしろめたさを禁ずることができなかった。

（一橋大学経済学部教授）